

琉球大学学術リポジトリ

大龍柱の正面性を，仁王像の構えや末広がりの階段との関係からの考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8089

大龍柱の正面性を，仁王像の構えや末広りの階段との関係からの考察

西村 貞雄*

(1995年8月31日受理)

はじめに

首里城正殿には33体の龍が配置されている。いずれも宝珠との関係があって、その位置づけは構えや方向性に重要な意味があると推測する。その関係を理解することは、龍を取り入れた内容や形態にも及ぶものがあるし、また、その当時の美意識を知る手掛かりにもなる。

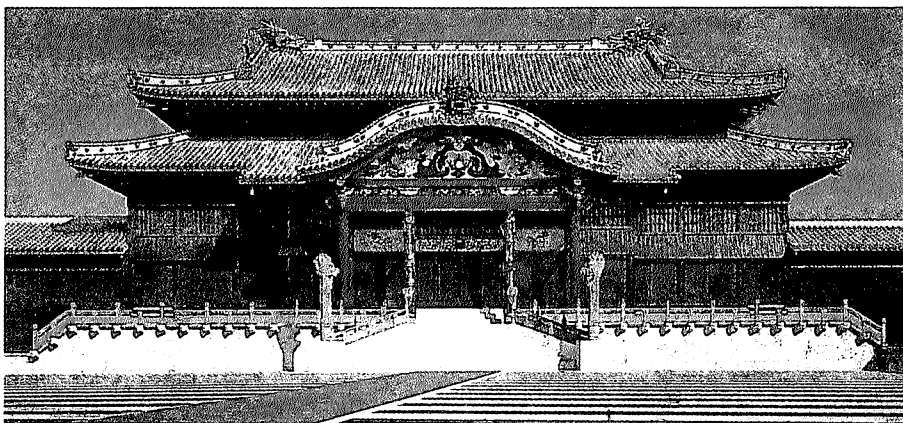
平成4年に復元された首里城正殿の大龍柱は、向き合う形で設置されている。その向きは、正殿における龍柱の形態や様式から判断して不自然な様相を呈している(写真①)。

龍柱の形態には、内側と外側の構えを考慮した製作意識が表れており、流れを作る方向性と構えを念頭においた位置づけからくる構図がある。また、大龍柱の正面性の構えは龍の尾の先

端の位置づけ、末広りの階段との関係、首里城には無いものではあるが、仁王像の手の配置等からも考察ができる。

1. 小龍柱が向き合っている理由

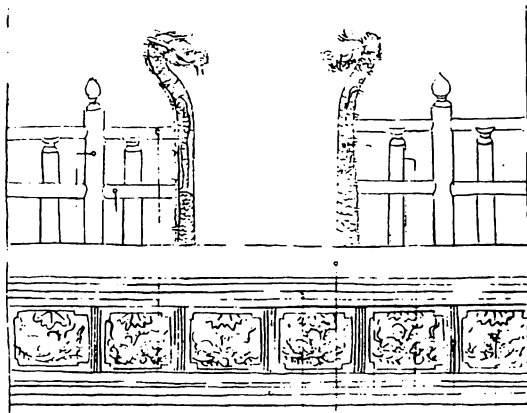
大龍柱が「御庭」に向かって構える態勢をとっていることを証明するには、基本的に同じ形態を採っている二階の御差床の龍柱(絵図①)や正面階段の小龍柱(絵図②)の形態を理解することが第一の条件である。例えば、大棟の龍頭棟飾りや額木等に配されている、中心に火焰宝珠を置き、左右から向かい合う龍や二階の御差床の龍柱、正面階段上の小龍柱は、皆向かい合う形をとっているために、大龍柱も当然、向き合う形が自然であるという、ごく初歩的な過ち



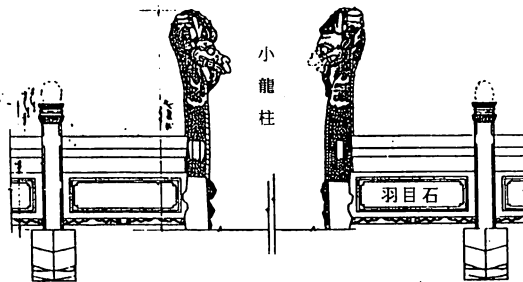
写真① 平成4年復元の首里城正殿

正面階段の大龍柱は、大きい台座に高く聳え立つ形で設置され、しかも向かい合う形になっている。

* 琉球大学教育学部



絵図① 「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」より、正殿二階、御差床の龍柱の背面は擬宝珠のある欄干につながって、向き合う形になっている。

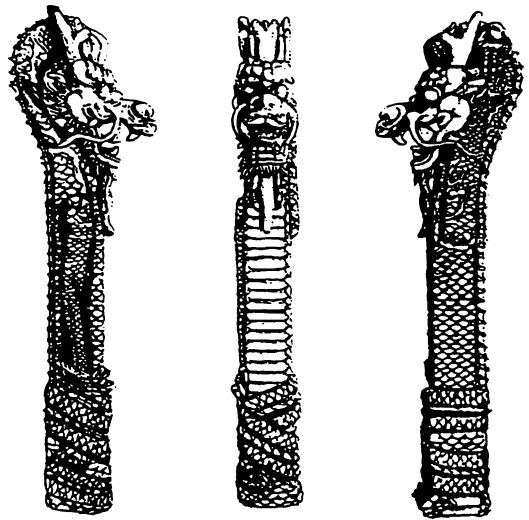


絵図② 「沖縄神社拜殿図」(昭和8年作成、文化庁蔵)より
正殿・正面階段、小龍柱の背面に欄干が組まれて、阿形、吽形が向かい合う形をとっている。

に陥りやすい。これらの龍がなぜ向かい合っているのかが理解できなければ、大龍柱の向きについても正しい答えは得られない。

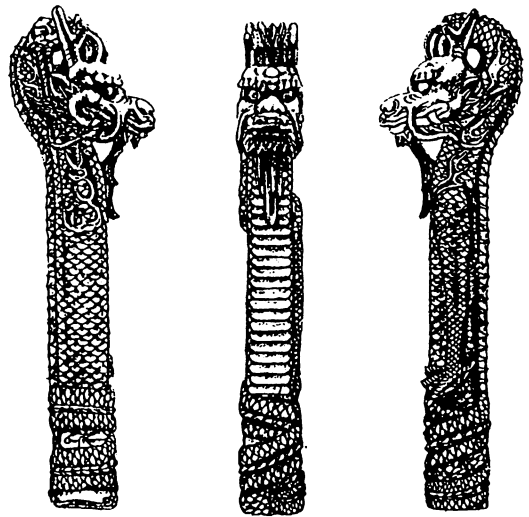
では、「小龍柱は、何故、向き合っているのか、」

首里城正殿の龍柱の特徴は、垂直に立っている四角状の太い胴体が柱になっていることである(絵図③)。このことは、二階の御差床の龍柱・正面階段の小龍柱・大龍柱すべてに共通している。御差床の龍柱や小龍柱には、背面(背骨)から欄干が連なっている。角柱の胴体と欄干は、一体化した形態になっている。この事から推測すると龍柱は、欄干の親柱という位置づ



絵図③ 大龍柱・阿形の右側面、正面、左側面の全体像である。

左前脚は、上に構えさせて宝珠を握らせており、右前脚は、下方へ向けて爪に緊張感を与える形で位置づけている。(西村原図)



絵図③ 大龍柱・吽形の右側面、正面、左側面の全体像である。

阿形と同じ態勢をとっているが、左右が逆の形で位置づけられている。右前脚は、上に構えさせて宝珠を握らせ、左前脚は、下方へ向けて爪に緊張感を与え、構える形で対応させている。(西村原図)

けになる。この親柱に阿形・吽形の構えを取り入れた龍の形態を与えていることから考えると、欄干は龍の流れや方向性を暗示させる機能を持つ

ており、その示す方向には、重要な意味がある。

小龍柱や御差床の龍柱は単に向かい合っているように見えるが、実際は、その龍の向きに龍の進行方向を合わせた形で欄干が造られている。阿形・吽形の龍は、進行方向に沿って構え、向き合うことによって、玉座に近づくものを迎える役割を果たしている。よって、大龍柱は欄干に沿って正面を向くことが、ごく自然な流れや構えをつくることになる。

2. 仁王像と大龍柱との比較

首里城正殿に配置されている龍や獅子像は、正殿に向かって左側が吽形（閉口）、右側が阿形（開口）で統一されている。この阿吽の配置は、日本の寺社等に見られる寺門の左右に位置づけられ、仏法の護持に当たる仁王像や狛犬、獅子像、建物に付随する龍等とも共通するものである。

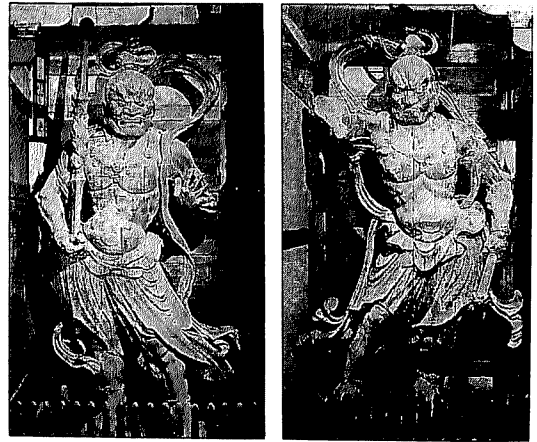
首里城正殿の龍柱には、阿吽の様式をとっている他にも、仁王像の構えと相通ずるものがある。例えば、仁王像は法隆寺中門（写真②）、東大寺法華堂等に見られるように、一般に向かって左側の吽形は右手を上左手を下に向け、阿形では左手を上右手を下に向けている（但し、東大寺南大門の仁王像は、阿吽が逆に配置されていて、向きも相対するように建っている。しかし、当初は正面を向いていた事が像の表面の状態や、正面にも柵が設けられている事などから分かる⁹⁾。写真③）が、龍柱にも同様の図式が見出だせる。正殿二階の御差床の龍柱や正面階段の小龍柱及び大龍柱いずれも、吽形は右脚に、阿形は左脚に宝珠を握って上に構えており、他の脚は対応させるかたちで下に構えている。只、仁王像と異なる点は、龍柱は単独に位置づけられているものではなく、欄干（高欄）と一体化した構造体であるということである。二階の御差床の龍柱を見ると、龍の流れや構える形は、御差床を囲む欄干との関係があるということが、位置づけられた状態からよく分かる。つまり、龍柱と欄干は一体化した構造体であり、龍の背びれと欄干が繋がること、龍の流れをつくる



仁 王 法隆寺中門⁹⁾

写真② 向かって左側が吽形（閉口）で、右手を脇腹の上部へ、左手は、左足の大腿部前方へと構える。

阿形は吽形と対応させる形で右手を下方に向けて大腿部側面に伸ばし、左手は肩の上方に握拳を構えており、いずれも身体をくねらせた動的な構えをとっている。



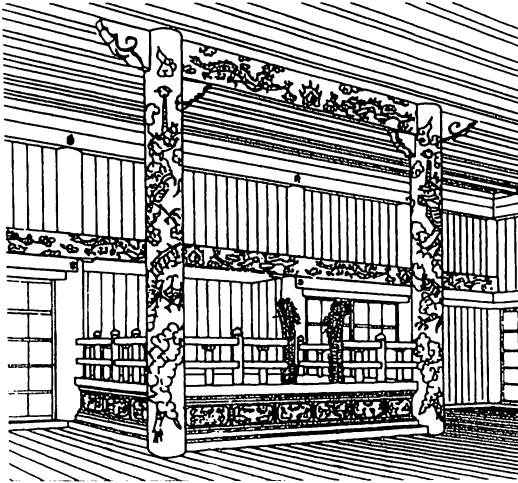
仁 王

写真③ 東大寺南大門⁹⁾の仁王像は、阿吽が通常とは逆に設置されていて向きも相対しているが、それぞれの像の正面が他の面より風化した跡がうかがえ、専門家は位置と向きが変えられたという見解をとっている。

上からも自然であり、守護する意味からも、回りを囲んで構える構成はうなづけるものである（絵図④）。この事は、小龍柱にも共通してお

り、左右からの欄干には獅子像も据えられて、守護の意味がより強調されている。

平成四年に復元された大龍柱は、欄干から分離され、大きい台座に立った状態で向かい合っ

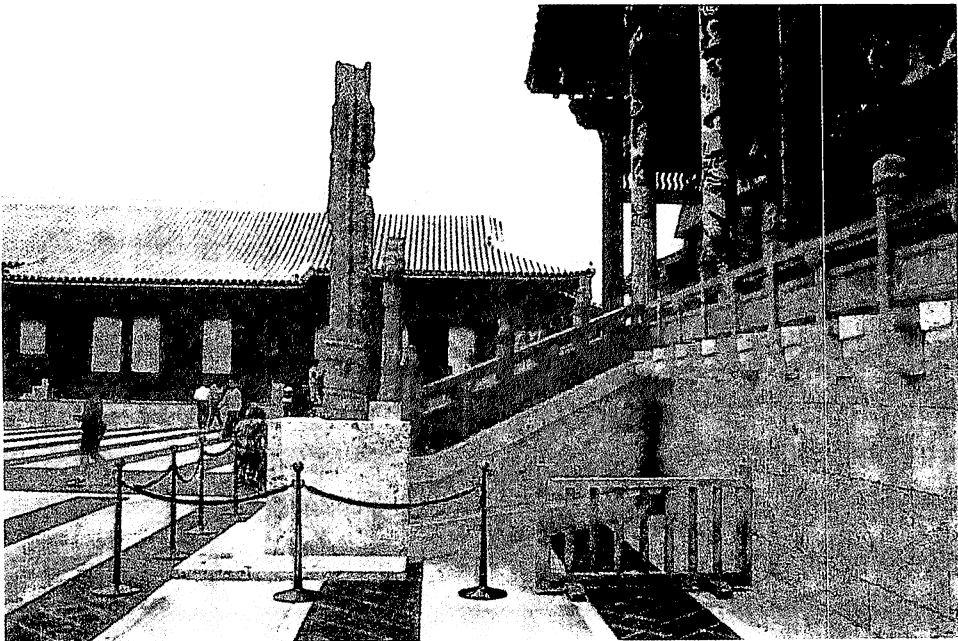


絵図④ 平成4年に復元された正殿二階・御差床の透視図^④である。「寸法記」を基にして復元した、木彫の阿形・吽形の向かい合う龍柱は、背面で御差床を囲んだ欄干と繋がり、一体化した構造になっている。

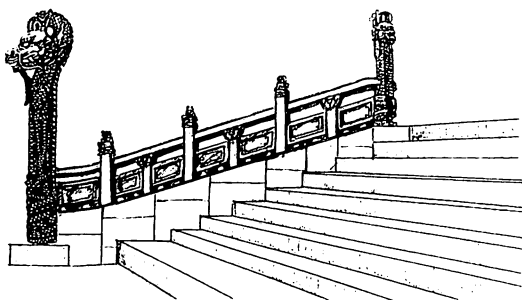
ている(写真④)。しかし、龍柱として共通の要素を持つ御差床の龍柱や小龍柱の形態から判断しても、大龍柱の背面に欄干が繋がる事は当然と思われる。この事は大龍柱が階段の両袖の欄干に連なって構えて御庭に向くことが、ごく自然な構えであり、また、末広りの階段の形も、龍の流れから判断して無理がない広がりを作っていると考えられる裏付けになる。

阿形、吽形の構えをとっている御差床の龍柱や小龍柱が共に向き合っているのは、欄干を背にして繋がれているためである。龍柱に共通するのは片方の前脚に宝珠を持っている事であるが、これは仁王像とは異なる点である。大龍柱は、御差床の龍柱や小龍柱と同じ形態であるので、欄干と繋がると考えれば、御庭に向かうことが有るべき姿になる(絵図⑤⑥)。大龍柱が御庭に向かって正面性をとると、仁王像の手の上下の関係と龍柱の前脚の位置づけが一致する事になる。

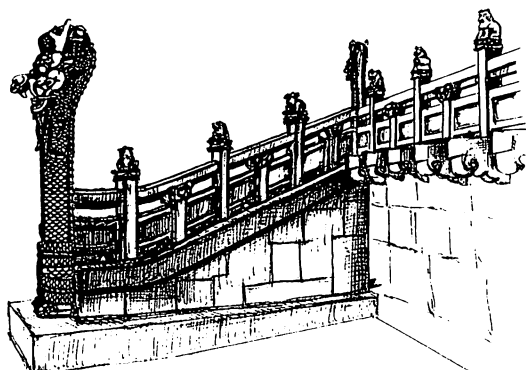
大龍柱が御庭に向かって正面性をとることによって、外側の前脚は上に位置づけられて宝珠



写真④ 大きな台座に立つ大龍柱は、小龍柱の高さと比較すると格段と高い。そのために末広りの階段の両袖の欄干とは切り離され、また、向かい合うことによって単独に存在させる形になっている。



絵図⑤ 大龍柱の吡形を階段内側から見た状態を想定すると、左前脚は内側に位置づけられ下方へと構えている。(西村原図)



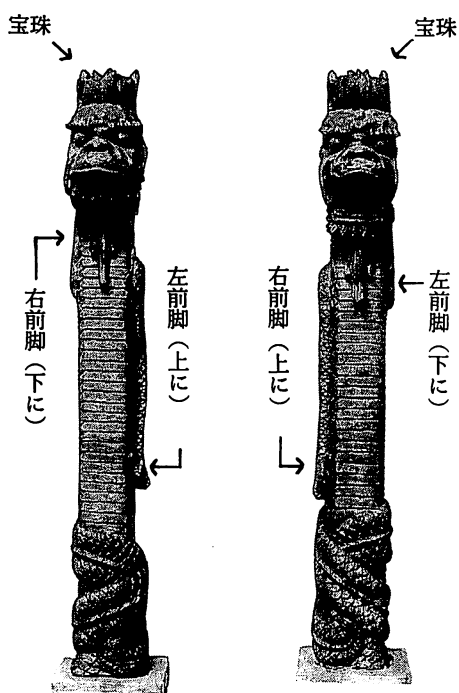
絵図⑥ 大龍柱の阿形を階段外側から見た状態を想定すると、左前脚が外側に位置づけられ、上の方に向けて宝珠を握っている。(西村原図)



写真⑤ 桃林寺(石垣市)の仁王像⁹⁾
正面に向く形態には、阿形、吡形とも外側の手は上に掲げ、内側の手は下に構える。

を持ち、下に構えている脚は内側に位置づけられてくる。上方外側に宝珠を、下方内側で爪に緊張感を与えて前脚を構えさせることは、正面階段の末広がりを意識し、より効果を増す事を考慮した配置である。正面に向けて広がりを作る階段や欄干と、大龍柱の前脚と宝珠の関係は、創建当初からの重要な発想だったと考えられる。

石垣市の桃林寺に仁王像がある。この仁王像は1737年(乾隆3年)、義翁住持の時に作られている(写真⑤)。百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記(沖縄県立芸術大学蔵…以下、寸法記と略す)が作成された年は1768年(乾隆33年)であり、仁王像と大龍柱(写真⑥)は同時期のもと考えられる。また、首里城正殿の建



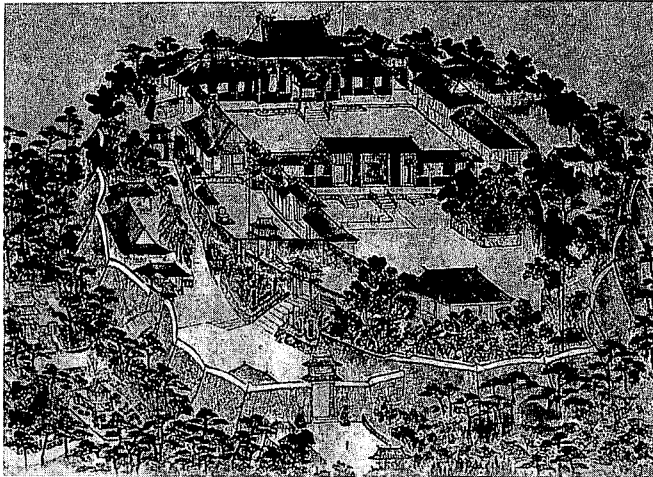
写真⑥ 大龍柱の形態と仁王像の形態を比較すると、右側が阿形で左側が吡形という共通性が見出だせる。また、正面を向くことによって、阿形の左手(前脚)は上に掲げ、右手(前脚)は下に構える。吡形もまた右手(前脚)は上に掲げ、左手(前脚)は下に構えるという共通する要素がある。

物に禅宗様式が取り入れられているということからも、仁王像の構えの形態は大龍柱と関連性があると考えられる。

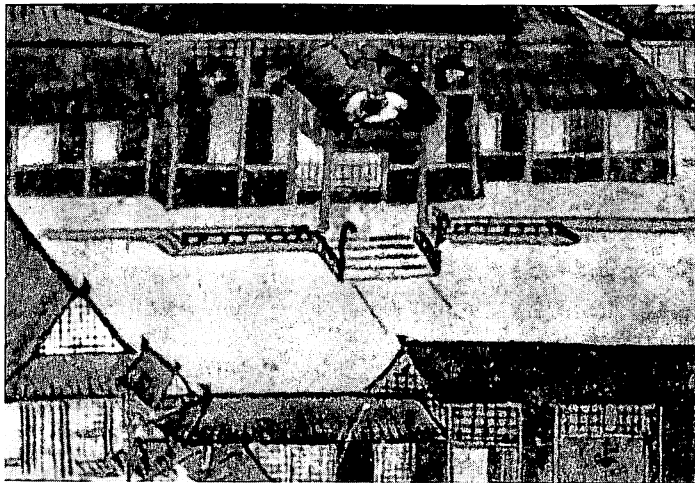
桃林寺の仁王像は、向かって左側は吡形で右手を上にして金剛杵を持つ。右側の阿形は持物は無いが左手を上につまみかかっている（写真⑤）。この構えは、龍柱（写真⑥）と相通ずるものであると共に、双方とも守護を目的として造られたものという点も一致している。

大龍柱では、龍の構える形態（守護を意味する）を末広りの階段の欄干という構造体の中に盛り込み、御庭に向けて位置づけている（写

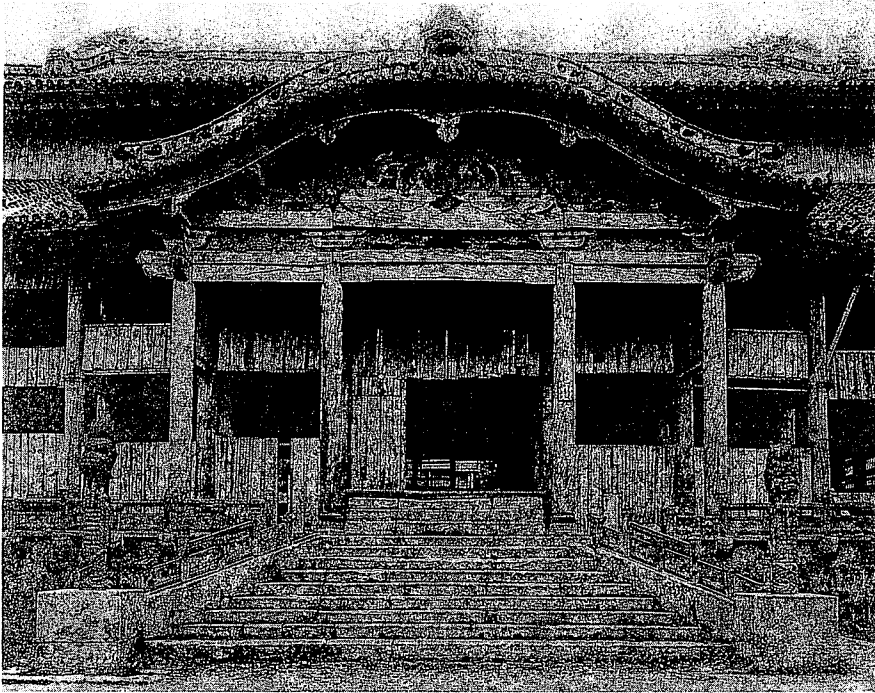
真⑦⑧）。末広がりという形の末端に大龍柱を置き、御庭に向けるということから、正殿の建物と御庭の空間ということ意識し、正面性を重視していることが分かる。正面性は守護するということと関連があり、龍や獅子、仁王像には重要なものであり、しかも、大龍柱においては正面に向けて構える事が、末広がりとの関係からも無視できない。この大龍柱には、欄干の柱という機能に阿吡形の様式を取り入れながら、空間の広がりをも考慮した構えを作るという美意識がある（写真⑨）。



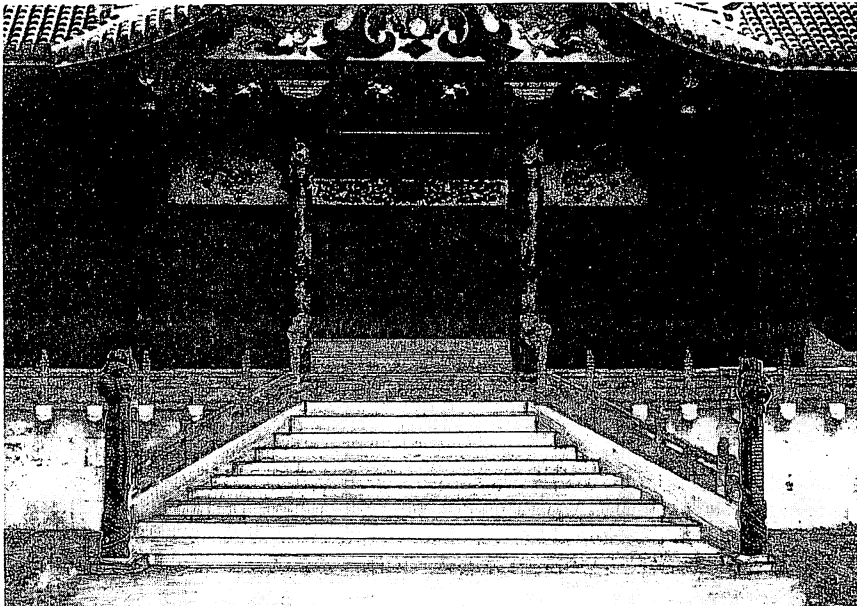
「首里城鳥瞰図」^⑧ 首里城全景の絵図（絵図の中でも古い）



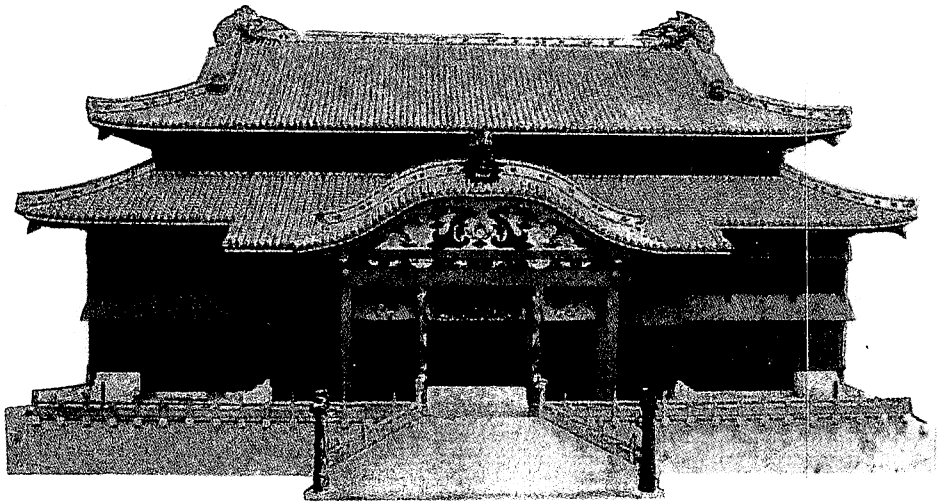
「首里城鳥瞰図」正殿正面の階段部分拡大
大龍柱は、台座が低く、勾欄に汲込まれて正面に向いている



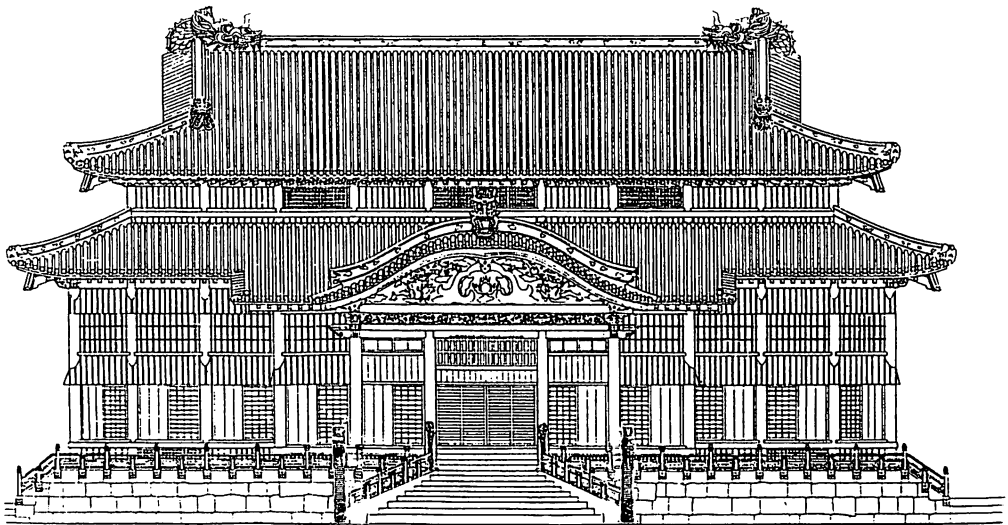
写真⑦ 大正11年頃 鎌倉芳太郎撮影[®]
 1768年の「寸法記」の頃から戦前の昭和にかけて、大龍柱は大きな台座に据えられていたと考えられる。



写真⑧ 写真⑦を元にして、全容の大龍柱を合成してみた（筆者）
 残された写真には大龍柱の後方の柱に未解明の「ほぞ穴」がある。また、今回大龍柱の全容を解明したことを基に、1768年以前の大地震による城壁57か所損壊や王府の財政難、龍柱を修理したという記述「首里城鳥瞰図」等から総合的に判断して写真合成を試みた。



写真⑨ 像が正面を向き構えることは威嚇と守護の意味を持ち、向かい合っている場合は許容の意味を含むという言い伝えを聞くと、大龍柱では首里城の守護を象徴する形で、正面を向くことが要求される。大龍柱を通り抜けられたものだけが、向かい合う形の小龍柱と対面する事になる。さらに奥に入った御差床でも龍柱は向かい合う形態をとっている。

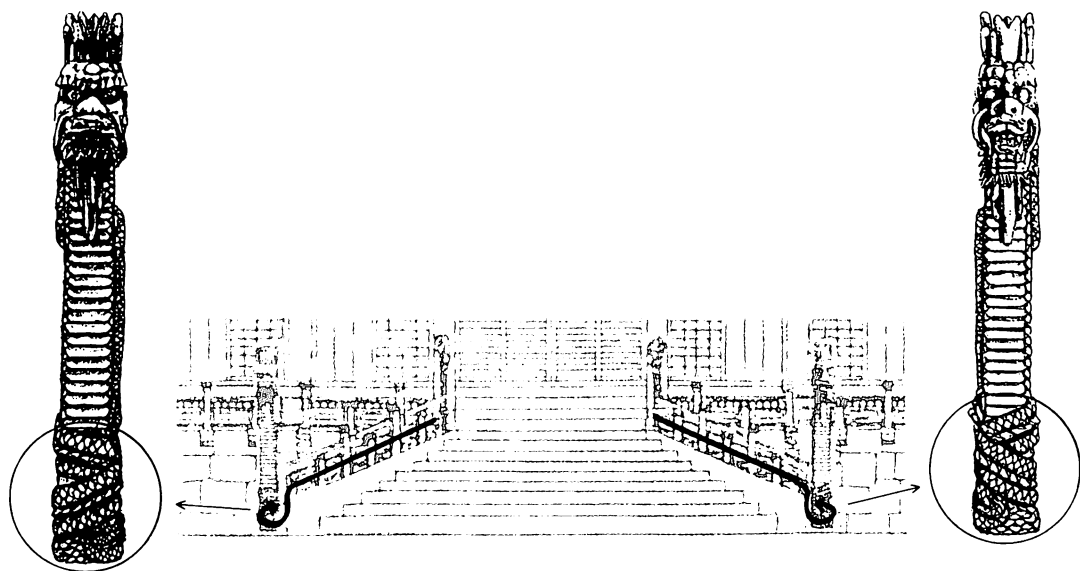
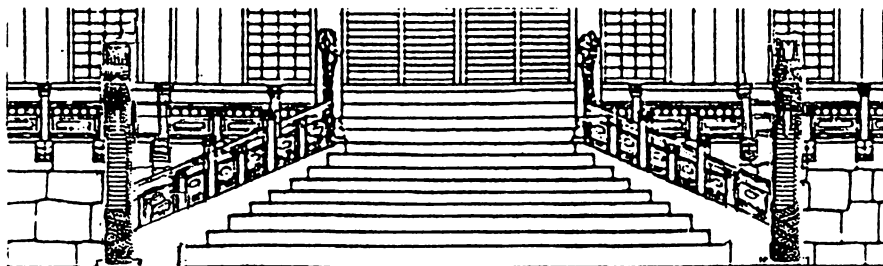


大龍柱の大きい台座を小さくし、正面に向ける（合成・西村）

3. 大龍柱の尾の先端と末広りの階段との位置づけ

正面階段の末広がり大龍柱の正面性には前述の事以外にも意識した意匠がある。正面から見た大龍柱の下部には尾が巻き付いているが、尾の流れは一端地中に潜り、螺旋状に上がってから下の方に回っていく。その尾の先端は、階段の内側の方から外に向けて旋回して龍柱の中

心に位置づけられている（次頁の図・写真参照）。阿形、吡形の双方が対応する形になっており、内側から外側に向けて広がりを作る意識の表れと見る。つまり、末広りの階段と両袖の欄干からの流れが、龍の尾の先端をアクセントとして強調されている。龍柱の形態は、そのもの持つ意味合いからも、周囲との関係からも意識してのデザインであると言える。



尾の先端が正面におさまるようになっている。



正殿の末広りの階段には、大龍柱と小龍柱が配置されている。大龍柱の大きな台座を取り除くことによって、大・小龍柱の高さのバランスがとれる。また、大龍柱が正面に向くことによって、尾の先端が内側から外に向かって、包み込むように曲線を描いて中心に治まる形をとっている。この尾の先端は末広りの階段と無関係ではなく、外に広がりを持たせるように工夫されている。小龍柱・御差床の龍柱も同じ形態をとり入れて外に広がりをつくっている。

おわりに

現在、設置されている大龍柱が、阿吽形の向かい合う形で大きな台座に聳え立つことは、当時の思想性や美意識から掛け離れたかたちになっている。これは、今後にも尾を引く問題であるし、首里城の独自性を主張する上からも負の要因を含んでいる。

世界文化遺産が叫ばれてから久しい。首里城にも文化遺産を強調する声があり、関心は高まるばかりである。しかし、世界遺産となる文化遺産の評価には、オーセンティシティ（真実性）という概念が使われており、意匠・材料・技術・環境の四項目にわたる国際基準に基づいて検討するとなっている⁹。

首里城が独自性・固有性を主張するならば、正殿の意匠（デザイン）である龍や獅子像の配置は重要な要素になる。龍柱の形態は独自のものであり、正殿の顔にもなる位置にある。現在の状態は、建物からも分離した形であるし、美

意識からも掛け離れた調和の取れていない存在になっている。

参考文献

- ① 「仏像図典」佐和隆研 吉川弘文館 昭和51年11月1日
- ② 文化庁監修「国宝」5 彫刻ⅠⅠ 1981年12月16日 毎日新聞社
- ③ 「世界の美術」12（カルチュア版）日本の彫刻 久野健著 1977年（株）世界文化社
- ④ 「琉球王府 首里城」(株)ぎょうせい 1993年5月 総監修 海洋博覧会記念公園
- ⑤ 「沖縄美術全集5」沖縄美術全集刊行委員会 沖縄タイムス社 1989年11月30日
- ⑥ 「沖縄文化の遺宝」鎌倉芳太郎著 1982年10月 岩波書店
- ⑦ 「月刊文化財」文化庁文化財保護部監修 第一法規出版株式会社 1995年2月